

司式: 佃 雅之
奏楽: 山田絵里

前奏: 「おお人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」 (J.S. バッハ)

招詞: 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。

主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。(イザ55.6,7b)

讃美歌: 18「心を高くあげよ！」

交読詩編 24 篇

- 01 【ダビデの詩。賛歌。】地とそこに満ちるもの/世界とそこに住むものは、主のもの。
02 主は、大海の上に地の基を置き/潮の流れの上に世界を築かれた。
03 どのような人が、主の山に上り/聖所に立つことができるのか。
04 それは、潔白な手と清い心をもつ人。むなししいものに魂を奪われることなく/欺くものによって誓うことをしない人。
05 主はそのような人を祝福し/救いの神は恵みをお与えになる。
06 それは主を求め人/ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人。〔セラ
07 城門よ、頭を上げよ/とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。
08 栄光に輝く王とは誰か。強く雄々しい主、雄々しく戦われる主。
09 城門よ、頭を上げよ/とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。
10 栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、主こそ栄光に輝く王。〔セラ

朗読聖書①詩編 34. 9-11

(アルファベットによる詩)

- 09 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。
10 主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。
11 若獅子は獲物がなくて飢えても/主に求める人には良いものの欠けることがない。

朗読聖書②ルカによる福音書 12. 22-34

◆思い悩むな

- 22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。
23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。
24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。
25 あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができるか。
26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。
27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。
28 今日は野にあって、明日は河に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。
29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。
30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。
31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。
32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。
33 自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。
34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

恵み深い天の父なる神さま、あなたの尊い聖名を賛美致します。今日こうして共に棕櫚の主日の礼拝を献げることが赦されている恵みを心より感謝致します。

神さま、私たちはこの朝、主の御受難を覚えて、この礼拝堂に、またライブ配信へと集められました。この礼拝を通して主の十字架の痛みを覚え、私たちのために流された愛の深さを知り、そして十字架によって与えられた恵みの勝利を知る時としてください。あなたは御子イエス・キリストをこの世に遣わし、ロバに乗ってエルサレムに入られたその主を通して、真の王の姿を私たちに示してくださいました。しかし主よ、あの日、喜びの声で迎えた人々が、やがて主を十字架へと引き渡して行ったように、私たちの心もまた移ろいやすく、あなたを第一とする歩みから離れてしまう弱さを持っています。どうか憐れんでください。この礼拝を通して主に従う心を新たにしてくださいますように。私たちが受難週歩みに入るにあたり、主の十字架に心に向け、あなたから頂いた罪からの解放の恵みに感謝を持って歩み生きていく者となることができますように聖霊が導いてください。

永遠の命の源であり愛なる神さま、全世界にあるあなたの民と教会を顧みてください。夫々の歩みと生活が主の御心に適うものとされていきますように。私たちが主に倣い、隣人への奉仕とあなたの真理を証しする務めのために喜びを持って自分自身を献げることができますように。

主よ、愛を求めながらも迷い、戸惑い、道を失い、途方にくれている人々を顧みてください。孤独の中にある者、苦しみの中にある者、助けを求めながら声を上げることもできない者を、あなたの憐れみの御手をもって支えてください。

戦争が繰り返されているこの世界の只中にあっても、恐れに支配されることなく、あなたの真理の光を歩むことができるようにしてください。そして私たちがまた、この世界のために祈り、主にある平和を証しする群れとして歩んでいくことができますように。

唯一の慰め主なる神さま、病の床にある者を顧みてください。また老いの寂しさの中で弱さを覚えている者を、どうかあなたの御手をもってお支えください。また様々な悩みの中で、今はまだ言葉にすることもできず、心の奥深くに痛みを抱えている者もおります。全ての者があなたの平安を受け、あなたに守られ、支えられ、夫々に赦されている日々の歩みを大切に歩んで行くことができるようにしてください。私たちのあなたを信じる心を決して消えることのない永遠の光で照らし、どのような時にも望みを失うことなく、あなたに信頼して歩み続ける者としてください。

主よ、今日の説教者を感謝致します。あなたは今年度、この教会に大谷昌恵牧師を遣わしてくださいました。私たちはあなたに感謝しつつ、共に喜び、共に悩み、共に祈りながらこの1年を歩んでまいりました。そのすべての日々の中で、あなたがた大谷牧師を病の苦しみと心の重荷を共に担ってくださっていたことを覚えます。どうかあなたによって大谷先生の心と体が癒され、再び立ち上がる日が備えられますように。

主よ、今日語られる説教を祝福してください。語る者にも聞く私たちにも、あなたの聖霊が豊かに働き、この礼拝が別れの時ではなく、あなたの恵みを共に数える時となりますように。これからも互いに愛し合い、支え

合い、御言葉に立って歩み続けることができますように、あなたがこの群れの真の牧者であり続けてください。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:309「あがないの主」

説教 「心穏やかに」

大谷昌恵

この一年間、私は『ルカによる福音書』11章から順を追って皆さんと一緒にこの講壇で読んで参りましたが、本日は少し先へ進んで、12章22節から34節を学びたいと思います。

私はこの信濃町教会に赴任するまでは、何時も聖書日課に従って説教をして来ましたので、ここで初めて講解説教をすることになり、初めはとても戸惑いました。御言葉を語るということではどの聖書箇所をどのような形で語ろうとも同じではありますが、今まで私が語ってきたスタイルとは全く違う説教をしなければならなくなり、どう語っていいか本当に分からなくなりました。しかしそういう時こそ「初心に帰る」と言いますか、神学校で学んでいたことを思い出して、一から丁寧に聖書を読んでいくことをしました。行き詰まった時は、とにかく聖書を何度も繰り返し読み、そこから神さまが与えてくださる御言葉を聞き取ることに専念しました。1年間1ヶ月に1回の説教させていただきましたが、なるべく丁寧にと思って進めてきましたので、1年経っても12章までしか進めることができませんでした。しかし私としては、改めて御言葉を深く味わい学ぶことができたのではないかと考えております。

さて本日の箇所は、マタイによる福音書の6章、いわゆる『山上の説教』の中にほとんど同じ形で記されています。イエスはここまで『ルカによる福音書』の11章からずっと、大勢の群衆に囲まれながらも弟子たちにまず必要なことを教えてきました。本日の箇所の直前、今回抜かした部分である12章13節から21節は弟子ではなく、群衆の一人からの言葉によってイエスは教える語っていますが、この22章でまた、弟子たちに対しての教える語り始めます。どれだけ多くのことをイエスは弟子たちに語りたかったのだろうかと思いますが、おそらくイエスとしては、語っても、語っても語り尽くせないほど教えておきたいことがあったのだらうと思います。

本日の箇所の後35節以下でも、イエスの教えるは続いていきますが、私はおそらくこの22節から34節までがイエスの教えるの最も根本的な部分、ここでのイエスの教えるの根幹にあたる部分なのではないかと思えます。ここでイエスは、まず弟子たちに言います。

「命のことで何を食えようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。」

ここで皆さんに注意していただきたいのは、イエスが「食べるものがあるだろうか、着るものがあるだろうかと思ひ悩むな」と言っているのではないということです。もちろんこの時代にイエスを取り巻いていた人々は貧しく、その日の暮らしにも悩む人が大勢いたことでしょう。まさに「明日着るものがあるだろうか、食べるものがあるだろうか」という悩みを抱えていた人もいたと思われます。しかし、イエスが教えるのはそうではありません。着るもの食べるものが与えられていることはイエスの中で当然のこととなっているのです。その与えられて物の中で「何を着るか 何を食るか悩む必要はない」とイエスは仰います。そこには「すでに神が命や体のために着るものや食べるものが必要なことをご存知で、当然のこととしてそれらを与えてくださっている」、ということが前提になっているのです。人間は神が造り出してくださった物です。そして同じように神が造り出してくださった自然界からの産物によって人間の命を維持してくださっています。もはや人間が心配することなど全く必要がないはず

のことを神に代わって人間が心配することなどの外れでしかありません。イエスは「鳥を見よ」と言います。鳥に限らず鳥たちは、自分で蒔くことも狩り入れることもしませんが、そんな鳥たちをも神は養ってくださいます。

25節に「思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」とあります。ここで「寿命」と訳されている「ヘリキア(ἡλικία)」というギリシャ語は、「年齢」とも訳せますが、ここでは「身長・背の高さ」と訳することもできます。つまり「人間は悩んだからと言って身長を僅かでも伸ばすことはできない」という意味に訳すことができます。確かにそうです。私も「もう少し背が高かったら」と思いますが、どんなことをしても自分で身長伸ばすことはできません。そんなこともできないのに、それ以上の他のことまで悩むことはないのです。

27節では「野原の花」について語っています。ここで語られる「野原の花」とは『百合』が考えられます。この百合に相当する花としては「ムラサキアネモネ」という花が考えられるそうです。ムラサキアネモネは春パレスチナの草原を華麗に彩り、まさにソロモンが着ていた紫色の衣装を思わせるほどに煌びやかな様子で咲くとのこと。この「野の花」も自分では働くことも紡ぐこともせず、それでいてあの「栄華を極めたソロモンに勝るとも劣らない華麗な花」を咲かせるのです。そしてそれは何故かと言えば、ただ神が配慮し装ってくださるからなのです。何もしない「鳥」に食べるものを与え、何もしない「野の花」に着飾るものを与える神、何故神がそこまでするかと言えば、「全てご自分が造り出したものであるから」です。その者への配慮を神は惜しむことをしません。そして「何よりも大切にご自分に似せて造られた人間に対して、それ以上の配慮をなさらないはずがない」とイエスは仰います。何を食えようか、何を飲もうかと思ひ悩むのは「世の異邦人が切に求めているものだ」とイエスは言います。これは異邦人たちが信仰している世の神々が、富や名声など人間の物質的な要求を神として崇めているからです。そのようなものを求めることは異邦人に任せおけばいい。しかし、「あなたの方の父である神は人間が生きていくのに必要なものは何であるか十分ご存じなのであるから、それを改めて神に求めることは必要ない」ということです。いかに神が私たちににとって大切なものは何であるかをご存じか、イエスはそれを改めて言葉にして私たちに教えてくださっています。

では、私たちが本当に求めるべきものが何なのでしょう。それは『神の国』です。「ただ、神の国を求めよ」ということ「神の国」の到来を求めよということです。神はご自身が存在し、そのご自身の言葉によって人間をはじめ、様々な物を造り出してくださいました。天地創造においては、まず初めに父なる神が存在していて、その神の言葉によって人間をはじめ、その他の全ての物が造り出されたのです。神はより小さなもの、より弱いものに対して殊に大きな恵みを与えてくださいます。だからこそ、「小さな群れ」である私たちが、心から「神の国」を求めるとき、神はそれを何の見返りも求めずに与えてくださいます。「神の国」を求めるとき、人間には何も他のものは必要ありません。物を持っていることで何を着ようか何を食えようかと心配するよりも、貧しい人々に「施し」をし、「尽きることのない富を天に積む」ことの方が大切なのです。「天に富を積む」ことは、その宝によって「神の国」を建て上げることにもなります。そしていずれ、「神の国」が到来する時、その「富」は私たちのために使われることとなります。何よりも、まず第一に「神の国を求めよ」こと、それこそが私たちがすべきことであり、神が求めておられることなのです。「神の国」においては、私たちは何も心配することなく、ただ安らかに穏やかに生きていくことができます。そのような「神の国」の到来を、私たちは心から求めていけばいいのです。そうすれば何も思ひ悩むことなく心穏やかに日々を過ごしていくことができるでしょう。

昨年四月、私がこの信濃町教会に着任して最初にこの講壇で説教したのが『棕櫚の主日』でした。そして今日最後の講壇も『棕櫚の主日』です。これも

また神からの目には見えないご配慮なのでしょう。昨年の『棕櫚の主日』に私は“ロバの子の背に乗ったイエスは、群衆たちからは一段高いところから何を見たか”というお話をしました。一年経った今、私は“そのイエスの足元にいた群衆たちは、この時、何を見ていたのだろうか”と考えています。あの日、つまり主イエスがエルサレムへと入場した日、多くの群衆たちはナツメヤンの枝を打ち振って“ホサナ、主の名によって来られる方に祝福があるように、イスラエルの王に(ヨハ12:13)”と大歓声をあげイエスを迎えました。その時の群衆の目には、まさにイエスが紫色の衣を着たソロモンのように見えていたのではないのでしょうか。確かにあの日のイエスには、率いる軍隊も捕虜もいませんでした。しかし、ローマ帝国の厳しい政治によって苦しめられ続けていた群衆にとって、“あの日のイエスは自分たちをこの苦しい状況から救い出してくれる、まさしく一人の偉大な王であり救い主だった”のです。そうやって熱狂する民衆たちに対してイエスは、何も仰いませんでした。“わたしが救い主である”とも、あるいは“皆が考えている救い主とは違う”とも仰らなかった。イエスにとってあの時の群衆たちは、ただ苦しみの中で希望を見つけたかのようなご自分の哀れな子羊たちに過ぎなかったのではないのでしょうか。

このエルサレム入場の日から始まっていく受難の日々、イエスは捕えられ、鞭打たれ、そして十字架へと道を進んで行かれます。最も側近くでイエスに仕えていて、その教えを日々聞いていた弟子たちでさえ理解することのできなかった主が飲まれる杯、それをイエスによって教えを受けたわけでもない人々が理解できるはずもありません。ただ自分たちを救い出してくれる王なのだと思っただけとしても仕方がないことなのです。群衆たちはこの時、思ったことでしょうか。“この救い主と呼ばれるイエスが私たちのためにしてくれるのは今の生活からの解放であり、苦しみ悲しみからの脱出だ”と。しかしそこにいらしたのは、そのような救い主ではありませんでした。“もっと大きな救いをもたらしてくださる方、もっと大きな恵みを運んでくださる方”でした。しかしそのことを知っていたのはイエスご自身だけでした。

人間の追っている罪を全てその身に負って十字架に架かり、その肉を引き裂かれ、その血を流して神との和解を成し遂げてくださる方、それが私たちの本当の救い主イエス・キリストでした。あの時、群衆の目に見えていたのが真の救い主の姿であったなら、人々は“ホサナ”と、喜びの叫び声をあげることができたのでしょうか。

本日の旧約聖書は詩篇 34 篇 9 節から 11 節としました。

09 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。

10 主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。

11 若獅子は獲物がなくて飢えても/主に求める人には良いものの欠けることがない。

「種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない鳥であっても「神は養ってくださいます」。「働きもせず、紡ぎもしない」「野原の花」を、「今日は野にあって、明日は畑に投げ込まれる草でさえ、神は装ってくださいます。」

それほどまでにしてくださる方が、私たち人間に必要なものを与えずに、見て見ぬふりをなさるのでしょうか。御許に身を寄せる私たちに、何の恵みも与えることなく追い払うようなことをなさるのでしょうか。そのようなことはありません。私たちに必要なものは神がご存知です。そしてその私たちに何よりも必要だと神が思っておられるのが、神ご自身との『和解』であり、神から与えられる『永遠の命』なのです。それを私たちに与えるために神は御子イエスを私たちに与えになり、その御子を十字架へと向かわせてくださいました。私たちのために何よりも必要なものを神はご存じだからこそ、私たちに希望の光を与え、『神の国』の到来を約束してくださいました。私たちににとって本当に必要なものは何か、それは神が与えてくださる『永遠

の命』であり、『神の国』なのです。

私たちはこの世の事柄に一喜一憂します。紫の衣を着た王を見れば、自分たちの助け主だと思って喜び、その王だと思っていた人が逮捕され役人に罵倒されれば、そのことに右往左往し、最後には失望のあまり王を責め立てます。それは私たち自身の姿なのです。私たちの待ち望んでいる王は紫の衣を着た権力だけに縛られた王ではありません。心から私たちを愛し、私たちのことを思い、私たち人間を罪から救ってくださる方です。どれほどの罪を犯そうとも、その罪の大きさにたじろぐとも、恐れることなく、慌てることなく、私たち人間を愛してお救いくださる方です。

ここから受難週の様子が始まります。日に日に十字架が近づいてきます。苦難の道を、十字架を背負い痛みを負いつつ歩んで行かなければなりません。しかしその痛みと苦しみの先には、ご復活の主イエスが待っていてくださいます。そのことに希望を置き、私たちは『神の国』の到来を待ち望みつつ、心穏やかに日々を過ごしていきたいと願います。

共に祈りましょう。

神さま、あなたは私たち人間にとって必要なことは何もかもご存知です。どうか私たちがあなたに背き、罪を犯したとしても、私たちから目を離さずに救いへの道を歩ませてください。十字架の死の苦しみの後には、ご復活の喜びがあることを私たちに示し、これからの受難週の日々を、主イエスの痛みと苦しみを覚えつつ、イースターに向けての歩みを整えてください。

この祈り、十字架に架かれ、私たちの罪を負ってくださった主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げします。アーメン。

讃美歌: 458「信仰こそ旅路を」

献金・感謝(勝倉初穂)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

父なる神さま、尊き聖名を賛美致します。どうか御国を来たらせてください。今朝、兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。

説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。全ては神の思うままに、他のことで悩むことはないという言葉に心を強められました。神に造り出された私たちが、この一週間を、御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。また大谷先生の一年の働きに感謝し、先生に神さまの豊かなお恵みがありますよう、お祈り致します。

私たちは必要なものを与えられ主の僕として生きることが赦されていることを感謝致します。今夫々が与えられたものの中から感謝と献身のしるしを御前にお献げ致します。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。主が教えてくださった「主の祈り」を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣: 讃美歌 91「神の恵みゆたかに受け」

祝福: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちの上に、いつまでもありますように。アーメン。

報告: (1)伝道委; はがき「イースター礼拝案内」の活用願い。北支区連合祈祷会委; 4/3(金)受難日祈祷会(Zoom)案内。(2)牧会委; 「相互牧会グループ」活用の勧め。(3)諸教会連帯資金運営委; 連絡誌「かけはし」発行案内。(4)会計; 会堂維持献金のお願い、&、ワンドロップ献金の現況報告。

後奏: 「イエスよ、わが命の命」(J.L. クレープス)

